

盛岡さんさ踊りの魅力を語ろう!



東北夏祭りのトップを飾る「盛岡さんさ踊り」。写真は、これまで32年間連続出場しているJRグループ。昨年は、社員や家族など総勢240名で参加し、笑顔で元気あふれる踊りを披露しました。



【出席者】 佐藤 年男さん (JR東日本・盛岡駅長)
 風見 好栄さん (IBC岩手放送・報道局アナウンス部)
 古館 友華さん (テレビ岩手報道制作局・アナウンス部)
 【司会進行】 鈴木稔氏 (盛岡さんさ踊り実行委員会 企画業務部宣伝部会長)

昭和53年に始まって以来、その魅力を増す「盛岡さんさ踊り」。今や、東北を代表する祭りの一つとして知られ、もうすぐ33回目の夏を迎えます。今回は、毎年祭りに参加している地元TV局の女性アナウンサー、そして盛岡の顔として積極的に祭りのPRに努める盛岡駅長にお集まりいただき、その魅力や今後への期待などを伺いました。



鈴木 ● 私は、第1回から運営に携わってきましたが、さんさ踊りはスケール感にあふれ、自信を持ってアピールできる祭りだと思っています。まずは皆さんに、参加してこそ感じる、さんさの魅力をお伺いします。

佐藤 ● 私も、20回以上さんさ踊りに参加していますが、祭りを最初に見た時、これは踊って楽しむものだと思います。盛岡駅長になってからは、JRチームの団長として、白い制服を着てパレードの先頭を踊っています。いい汗をかけるし、盛岡の夏を感じるイベントですね。会社チームで参加することで、社員や家族どうしのコミュニケーションにもなりますし、他のチームとも会社を超えて気持ち一つになれますね。

鈴木 ● なるほど、古館さんはいかがですか。

古館 ● テレビ岩手のアナウンサー陣も、毎年踊りに参加するのですが、昨年はそれに加え、沿道のお客様に風船を配りました。それによって、お客様とコミュニケーションがとれますし、一緒にさんさ踊りを楽しむ感覚を共有できた気がしました。沿道

で観ていると、次はどんな団体が来るか、ワクワク感があるじゃないですか。その期待にきちんと応えられるパフォーマンスをしたいから、練習や準備にも熱が入る。参加することで当日のパレードだけでなく、準備段階も含めて楽しめますね。

風見 ● 参加していて感じるのは、お祭りをつくっているのが参加している自分達なんだと実感できることですね。お祭りを支える一人だという誇りも持てます。それと、何度か参加するうちに、できれば、美しく踊りたいと思うようになりました。しなやかにダイナミックに！昨年は、息子の幼稚園チームにも参加したんですが、その際、元ミスさんのお母さま方が踊りの指導をしてくれました。細かい手の動きなどを教えていただいて、きれいに見せる踊りのコツっていうのがあるんだなあ、と改めて知ったんです。きちんと教えていただき本番に臨んだら、踊っていても気持ちよく、いつもより声援が多い気がしました(笑)。

佐藤 ● 沿道で、早くから待つてくれるお客様のことを考えると、しっかりといい踊りを見せたいと思いますよね。

鈴木 ● 以前、旅行関係のアンケートに、パレードは平坦で1く

2時間も観れば飽きるという声もあつたんです。「盛岡さんさ踊り」は「盛岡川まつり」が始まり。もともと輪踊りだったのを、観客に見せるためパレードにアレンジし、栄夜差踊りや福呼踊りを加え工夫を重ねてきました。花車を出して立体感のある見せ方をするなど、いろんなアイデアを出しながら、今に続いているわけです。参加する側もワクワク感をどう演出していくかが大切ですね。



鈴木 ●何より、踊りに参加してください。踊りに参加してくださるんですが、一番楽しめるところなんです。会場に足を運び、スケール感あふれるパレードを観るだけでもさんの魅力を感じていただけたらと思います。皆さんはどう思いますか。

古館 ●私は、ずっと踊りを続けてきました。やはり太鼓への憧れがあります。練習がはじまり、太鼓の音を聞くと、盛岡にも夏が来たなあと感じますね。祭り会場でもインパクトがあるのは、太鼓の力強い響き。3年前、太鼓パレードがギネスにも登録されたんですね。世界一の太鼓パレードを間近に見る魅力はもちろんです。その証明

書を一般客が見ることはできるのですか(？)。もし可能なら、どこかに公開設置されるといいですね。「ああ、この太鼓のパレードがギネス記録なんだ」と、市民の皆さんも目でみてわかり、誇りに感じるのでは。

鈴木 ●なるほど、コピーでもいいので、展示されるといいですね。

佐藤 ●パレードは、次から次へとやってくる迫力があるし、トータル規模であれだけの踊りと太鼓を見られる祭りは珍しいです。出場グループそれぞれの違いも楽しめると。

鈴木 ●今年は祭り開催中の4日間、県公会堂で、その場で覚えられるさんさ踊り講習会をする予定なんです。やっぱり、観てもらうだけではなく参加してほしいですから。伝統さんさ団体などの協力を得て、毎日パレード開始前1時間ほど行います。こういう場所を、1カ所だけでなく、今後少しずつ増やしていきたいと思ってるんですよ。

古館 ●当日になってお祭りに参加したくなった人はもちろん、もう一度、踊りをおさらいしたい時も便利ですね。

鈴木 ●ぜひ、ご利用ください。風見さんは、観るさんの魅力をどう考えますか。

風見 ●まず、チームごとに同じ揃いの浴衣で踊るのが圧巻です

よね。浴衣の色やアレンジ、装飾などファッションを観るのも楽しいですから。

鈴木 ●沿道のお客さんにとつては、次にどんな団体がやってくるか期待感がありますよね。

風見 ●それから、小さな子ども達。小さな体で大きい太鼓を抱えて元気に踊っている姿を見ると、つい応援したくなります、かわいくって。全く知らないご年配の方々も、それを観て、大きな声援を送る姿をよく見かけます。大観衆の中で、あの距離を踊りきることは、子ども達にとつても、大きな自信になると思います。

鈴木 ●ちびっこの踊りは、沿道の観客も元気をもらいます。ここ数年、ちびっこさんさをはじめ子ども達の参加も増えていま



2007年6月、「最も多い2571個の和太鼓演奏」として、ギネス記録に登録。市民の力が結集された成果です。

すよ。運動会等で、さんさ踊りをやる学校も増えていきますから。

佐藤 ●地元の伝統に親しむきっかけですからね。子ども達がそれを受け継いで祭りに参加してもらおうのは、将来を考えると頼もしいことです。

鈴木 ●市内の小学校や幼稚園等にもだいぶ浸透してきたようですよ。30年以上続けて、やっそこままで来ました(笑)。

風見 ●運動会ばかりでなく、地域のお祭りやイベントなどでもさんさ踊りに触れ、慣れ親しんでほしい。そうすると、地元こんなすてきな踊りがあるんだ!と、自然に身についていく気がします。パレードも、子どもが出ていけば、おじいちゃんやおばあちゃんなど、応援する人も増えて、祭り全体が盛り上がるのでは。

佐藤 ●実際、踊ってみたいけど、きっかけがない...という場合も多いようです。会社や地域のどちらにも、さんさと関わる機会のない人が相当いらっしやる。そんな方々向けに体験や練習の場があるといいですね。



鈴木 ●皆さんは、祭りに何度も参加しているので、その魅力を

いろいろな感じていらっしやいますね。では、それぞれがお勧めする「盛岡さんさ踊り」の楽しみ方はありますか。

佐藤 ●ちょうど7月から8月は『ゆかたのまち盛岡』のキャンペーン期間。浴衣を着て、祭りを見に行くのもまた一つの楽しみですね。せっかくの企画ですから、もう少し連動的にPRできれば、盛岡の夏全体をアピールできそうです。

風見 ●私も、1日はお祭りに参加して、あと1日は浴衣でお祭りを見に行くというのが、楽しみ方としてお勧めです。今、全国的に和服の良さが見直され人氣が高まっていますし、さんさ踊りの季節は、普段着られない浴衣を着る絶好のチャンス。若い子たちもどんどん浴衣で歩いてほしいですね。そうすると、あちこちにお祭りの雰囲気があるふれ、街全体が盛り上がりそうです。

古館 ●ええ、ぜひ男性も、さんさ用ではなく、粋な浴衣で街に出てもらいたいです。

鈴木 ●そうそう、『ゆかたのまち盛岡』のキャンペーンでは、浴衣を着ていらした方に、各協賛店がウエルカムドリンクなどのサービスをしています。今年から、商工会議所の観光・料飲・サービス部会の企画で、7



「33回目の『盛岡さんさ踊り』は、まだ進化中。もっと受け皿を用意し、参加への間口を広げていきたい」(鈴木)

月26日からさんさ踊り期間中にきりっと冷やした地酒のワンドリンクサーブもはじまります。こちらは、浴衣を着ていなくてもサーブを受けられるんですよ。

風見 ●それはいいですね。さんさ踊りをきっかけにした、いろんな楽しみ方があっていいと思います。

佐藤 ●こんな企画はどうでしょうか。開催期間中に県内のお祭りを1日ごとに招待して、さんさ踊りと交流するとか。それによつて、観る側も楽しみが広がり、岩手県全体が盛り上がるのでは。

うすれば、もっと楽しめるのではという提案はありますか。

佐藤 ●以前、会議の中で、「盛岡はさんさの街というけど、祭りシーズンでないとき踊りは観られないんですか」という話が出たことがあります。例えば、さんさに由来する3の数字に併せて、毎月3日や第3土曜とか、盛岡でもっとさんさ踊りを楽しめる場面をつくりだせないものでしょうか。それから、パレード会場の様子を、駅前の滝の広場で映像に映し出し、街全体でお祭りの雰囲気づくりができないかとも思います。



風見 ●練習に関わることでありますが、参加者のなかには、義務感で参加する人もいると思います。私は、昨年元ミスさんさの方に教えていただいたのですが、やっぱり美しく踊りの基本を学ぶいい機会になりました。例えば、ほんぽんと手を合わせるところも、「2つハートをつくるように」と教えてもらっただけで踊り



「きちんと踊りのコツを教えてもらえば、気持ちよく踊れる。美しくしなやかに踊りたいという意欲にもつながります」(風見)

鈴木 ●こうして話すだけで、さまざまなアイデアがでてきますね。33回目である「盛岡さんさ踊り」は、まだまだ途上にもあります。今後への期待、そして市民と一緒に創りあげていく上での意見や要望などはありま



も変わるし、教え方のポイントもわかります。そこで、元ミスさんさの皆さん方を各会社に派遣いただいて、練習デーを設けるとか。そうすると、会社の男性陣も気合が入るのでは(笑)。

鈴木 ●なるほど。今後、検討していきたいですね。

古舘 ●もっと、県外の人に「さんさ」を知ってもらうにはどうしたらいいんでしょう。「盛岡さんさ踊り」は、東北で真っ先にスタートを切る夏祭り。盛岡を青森や秋田の祭りへ足を運ぶ拠点にして、東北の夏祭りを存分に楽しませよう!という位置づけのPRを、もっとできないものではないでしょうか。

鈴木 ●そうですね。佐藤駅長、東京方面の旅行者は、1つの祭りを目的に来る方が多いのですか。

佐藤 ●1つだけではなく、2、3の祭りを一緒に観に来るケースが多いですね。青森のねぶた祭や秋田の竿灯祭も、日帰りで

観ることができると。盛岡に宿泊拠点を決めて夜のさんさ踊りを観て、前後の日に青森と秋田を組み込みます。要は、さんさが一番初めの祭りというイベントをどう持たせるかが重要ですね。

鈴木 ●「盛岡さんさ踊り」が4日間開催になって4年目。祭りの期間中は観光客も増え、経済効果も高まりますから、どんどんアピールしたいものです。

佐藤 ●守り継ぐべき伝統と共に、変化を加えることも大事ですね。守るという意味で次の10年を視野に入れば、どうしても若い人の力は必要ですから、若い世代の意見を、どう取り入れるかですね。

風見 ●県外出身者の私が「えっ」と驚いたのは、20、30代の盛岡出身者で、さんさに参加したことのない人が意外と多いことです。だから、「盛岡で生まれ育った人は必ず参加したことがある」といえるぐらい参加者が増え、それ自体が売りになればスゴイですね。そういう意味で、受け入れる場のサポートも必要ですね。

古舘 ●私の場合、せっかく盛岡に住んでいるから、さんさを踊れるようになりたいと思っただと、運よく加賀野地区にあるさんさの会の方から誘っていただきました。でも、自分から、その場を見つけ出すのは難しいと思います。



「参加する人と観る人、ポジションは違っても、皆が祭りをつくる人。その一体感や感覚を共有できるものを」(古舘)

鈴木 ●逆に、ある程度年齢を重ねた方でさんさを始めたい、という人もいらつしやいますから、あちこちに受け皿をつくり、底辺を広げなければいけませんね。

古舘 ●だれでも参加できるチームがあるといいですね。各企業チームも一般参加を受けつけますが、やはり関係者でないとうりにくい。とりあえず入れる「ビギナーチーム」があれば、そこから底辺が広がって、子ども達の参加増にもつながるのでは。

鈴木 ●家族でさんさ踊りをやると、共通の趣味もできて仲良くなるんですよ(笑)。

佐藤 ●私自身も、本当にさんさが楽しく出ています。

古舘 ●仕事の顔しか知らない会社の方々も楽しそうに踊っている姿は、親しみがわきますね。

風見 ●「盛岡さんさ踊り」は、皆が参加できて、お祭りを観に来る方に対しても優しいお祭りであってほしいです。

古舘 ●そうですね。例えば、子連れのお母さん方は、子どもの手を引いて歩くのが大変そうに見えます。飲食店がお手洗いを貸し出し、オムツ替えの協力をするとか、お水やおしぼりのサービスをするとか。お年を召した方も、小さな子も一緒に楽しめるお祭りがいいですね。ちな

みに、テレビ岩手も、パレードのスタート地点なのでトイレを開放しています。バリアフリー仕様のトイレもあるんですよ。

風見 ●踊りたくても、足が自由などの理由で参加できない場合もありますね。だから、会場に踊り以外の楽しみ方を一つでも多く準備しておけると、皆で創りあげて楽しめるお祭りになっていくのでは。

佐藤 ●今まで話したことを「皆さんに優しい安心して来られる祭り」としてPRしていきたいですね。例えば、現在開放している男子トイレの一部を、期間中は女子に開放する等、簡単にできるところから始めていくのがいいですね。

風見 ●意外と小さなことで、お客様からの印象って変わりますからね。

古舘 ●ウチワ、手ぬぐい、ミニタオル：など、なんでも構わないですが、さんさ踊りを観に来る人と祭りの参加者が同じものを持って、カタチとして一緒に祭りをつくる感覚を分かち合えるものがあるといいですね。

鈴木 ●今年は、「さっこちゃん」というキャラクターも登場しました。せっかくだからうまく活用して、皆で思いを共有したいですね。まずは、一人でも多く祭り会場にきてもらうために、私たち自身が楽しんで踊りましょう。

取材／SANS A企画編集委員会



「街全体でさんさの賑わいを出し、運動的にPRすれば、盛岡の夏全体をアピールできる」(佐藤)